



Breeding report

1

ニホンリス由利子の繁殖

飼育展示担当 主査
鈴木 昌典

2025年5月、6年ぶりにニホンリスが繁殖しました。出産したのは、2024年11月に仲間入りした由利子です。

由利子は食欲旺盛、活発な女の子で、同居を始めた当初は、仲間を追いかけっていました。

ところが、繁殖期に入ると、オスに追いかけられたり、巣箱にこもることが増えたりと、行動に変化が見られるようになりました。

少しずつ由利子のお腹が大きくなり、普段は目立たない乳頭も出てきたため妊娠を確信。落ち着いて子育てができるように巣箱を増やしたところ、日中は巣箱に入り、夕方頃に餌を頬張るようになりました。

子育てはすべて由利子に任せ、飼育員は巣箱をのぞくことも

しないと決めていました。しかし、鳴き声や動く音が聞こえないが巣箱に耳を当てるなど、担当としては落ち着かない日々が続き、巣箱を開けて中をのぞいてしまいました。

すると、巣箱の中で2頭の赤ちゃんが元気に動いており一安心。無事に育つようお願い、再び巣箱を閉じました。

数日後、巣箱から4頭の赤ちゃんが出てきました。一生懸命に育ててくれた由利子に感謝しつつ、次は展示場整備に取りかかりました。

リスは汗をかかないため、体温調整が難しい動物です。出産後の由利子と子どもたちが暑さをしのげるよう、展示場内に直射日光を遮るための植樹と、凍ったペットボトルの設置を行いました。

出産後は少し痩せていた由利子の体も元に戻りつつあり、4頭の子どもは元気いっぱい展示場の中を動き回っています。



お母さんの由利子



すくすく育っている4頭の子どもたち



Breeding report

2

ワオキツネザルのジャングルジム

飼育展示担当
越後屋 真優

野生のワオキツネザルは樹上で生活しており、木から木へジャンプして移動します。体重が軽く、手足の構造から助走なしで3m以上ジャンプできるほど高い運動能力を持っています。しかし、寒さに弱いため、動物園ではワオキツネザルを冬期間に外に出してあげることができません。これでは、運動不足による肥満やストレスに繋がってしまいます。

そこで、暖かい季節にはより活発に運動できるよう、屋外展示場にジャングルジムをイメージした遊具を設置しました。設置後、ワオキツネザルたちは、4mほどの高さでも軽々とジャンプし、たくさん運動するようになりました。春に生まれた仔もようやく親から離れ、大人のまねをしてピョンピョン動いている姿はかわいらしく、とても癒やされます。

高い遊具の上では、ジャンプして運動するだけでなく、ひなたぼっこをしてくつろぐ姿も見ることができます。

ワオキツネザルは体温調節が苦手なサルで、日が出ているときはお腹を太陽に向けて座り、体温を維持します。以前は地面で行っていることがほとんどでしたが、最近では遊具の上でもこの行動が見られるようになりました。

ワオキツネザル一番の特徴は尾ですが、地上を歩くときには上にピンと立て、樹上にいるときは下にだらんと垂らします。ジャングルジムで運動する姿はもちろん、このような尾の違いなどもぜひ皆さんに見ていただきたいと思います。



ジャングルジムで遊ぶワオキツネザル



ひなたぼっこする
ワオキツネザル



地上では尾をピンと立てる



樹上では尾を下に垂らす

Breeding report

3 祝20歳! ツキノワグマのルビー

飼育展示担当(動物専門員)

堀籠 麻子

ツキノワグマのルビー(メス)が20歳を迎えました!
ルビーは、2005年1月22日に北秋田市のくまぐま園で生まれ、2010年に大森山動物園に来園しました。

私は2025年5月からルビーの担当となりましたが、まだ経験が浅いため、前任者から聞いた冬ごもり明けの体型にまつわる話を紹介します。

クマは冬になると餌が採れなくなるので、消費エネルギーを節約するために活動を制限する冬ごもりをします。これに備えて秋にたくさん食べてむっちり体型になりますが、春になると痩せた状態で目覚めます。そのため前任者は、目覚めたルビーが痩せてお腹を空かせているだろうと思い、木の実や野菜などをたくさん用意していたのですが、冬ごもり明けのルビーは秋と変わらない

むっちり体型のままでした。秋にしっかりと蓄えて、春まで体重が維持されているのは、冬ごもり前後の体重管理としては成功ですが、このまま夏まで太った状態だと夏バテしてしまう恐れがあるため、春からは、ルビーのダイエットを開始しました。

愛嬌のあるルビーの誘惑に負けておやつをあげてしまうなど、ダイエットは困難を極めました。時に心を鬼にして食事のコントロールを続けてきたことで、ルビーは健康に20歳を迎えることができました。

私も、前任者たちの努力を受け継ぎ、信頼関係を築きながら、ルビーが楽しく健やかに過ごせるようサポートしていきたいと思っています。



20歳を迎えたツキノワグマ・ルビー



愛嬌のあるルビーは飼育員を誘惑



冬ごもり明けのルビー

動物病院から カンガルーの治療について



飼育展示担当(獣医師)

佐々木 優

2025年8月現在、大森山動物園では2か所の展示場で計12頭のアカカンガルーを飼育しています。エサやり体験が可能なか、展示場の一部が来園者に開放されており、空間を共有して間近に観察することができます。

そんな(基本的には)平和的・友好的なカンガルーたちを苦しめているのが、俗に「カンガルー病」と称される「カンガルー類の進行性歯周病」です。この病気にかかると、歯の周囲や口腔内に炎症および感染症が発生し、病変が周囲の組織や頭部の骨の中にまで進行することで、様々な合併症を引き起こします。この時、しばしば顔の腫れを伴うことから、この病気は英語圏では「lumpy jaw(こぶ顎)」と俗称されます。罹患には、飼料や環境、感染菌種、口腔内の外傷等、様々な要因が挙げられていますが、飼育下のカンガルーにおいて、最も高い罹患率、死亡率を有しているにも関わらず、決定的な病因や治療法が判明していません。裏を返せば、多因子の総合作用により成立するとも考えられます。これらの要素をなるべく排除し、発症時には対症療法と

経過観察、必要であれば麻酔下の処置を行うことが、目下の対策となっています。今後も、カンガルーたちの愛くるしい表情を守るよう、日々飼育環境を整え、経過を注視していきたいと考えています。



エサやり体験可能なふれあいコーナー



カンガルー病で腫れた顎